

平成 5 年 12 月 8 日

国際観光振興会

平成 5 年度
「外国青少年を対象とした懸賞論文
入選者との国際交流」

＊モンゴル青少年
エッセイコンテスト＊

エッセイ標題：
「日本について私が思うこと」

主催：シップ・アンド・オーシャン財団

実施：国際観光振興会

後援：運輸省

「外国青少年を対象とした懸賞論文入選者との国際交流」事業は、財団法人シップ・アンド・オーシャン財団（笹川良一会長）の委託を受け国際観光振興会が昭和58年度より継続して実施しているもので、次代を担う青少年を日本に招請して実際の日本の姿を見てもらい、国際相互理解の増進に寄与することを目的としています。

これまで対象とした国には、アメリカ、カナダ、英国、フランス、オーストラリア、旧ソ連、韓国、中国などがありますが、いずれの場合も来日した青少年は日本との出会いを楽しみ、新しい知識を貪欲に吸収し、日本の青少年と多くの友情を結んで帰国しました。

今年度はモンゴルの中学生、高校生及び大学生を対象に、モンゴル語による「日本について私が思うこと」と題するエッセイを募集し、応募総数1,130編の中から優秀作品20編を選出しました。作品の募集は新聞（2回）、テレビ（6回）、ラジオ（5回）を利用し、モンゴル国全域に向けて行いました。

入選者20名は平成6年1月22日から2月1日までの11日間、東京、箱根、京都、広島を訪問して、日本の青少年との交流の他、観光施設の見学、伝統文化の観賞・体験、先端技術（エレクトロニクス）の見学等盛り沢山のスケジュールをこなすことになっています。また、広島ではホームステイも計画されており、日本人の日常生活にも触れてもらう予定です。

本編は入選者20名のエッセイを翻訳したもので、モンゴルの青少年の日本に対する見方がうかがわれ興味深いものばかりです。モンゴルに「友達の多い人は草原のように広くて大きい。友達の少ない人は掌くらいに小さい。」という諺があると入選者の1人のトブシントグス・エンフプレブさんが教えてくれますが、これらエッセイがモンゴル・日本両国の青少年の交流の輪を広げ、両国の青少年が草原のように広くて大きく成長する契機になることを願うものです。ご一読賜れば幸いです。

なお、本エッセイの募集、入選者の審査にあたっては、モンゴル科学・教育省、モンゴル国立児童センター、在モンゴル日本国大使館から多大の協力を賜ったことを申し添えます。

国際観光振興会
事業第一部

モンゴル青少年エッセイ・コンテスト入選者

名前	性別	生年	所属校	頁
1. トブシントグス・エンフブレブ	女性	1975年	ツォク外語大学日本語学科	2
2. ダシドルジ・ダシムンフ	男性	1974年	モンゴル国立民族大学 モンゴル学部ジャーナリズム学科	5
3. ムンフバヤル・エンフトヤー	女性	1978年	首都10年制第83学校数学課	7
4. ガルサン・ボルドゥビルゲーン	男性	1979年		9
5. エルデネチョローン エルデネトルガ	男性	1977年	ウスブリーン創作中央学校	13
6. ダシドンドギーン ボロルゾイ	男性	1976年	ウランバートル市10年制第一中学校	15
7. ダシニヤム ビャンババートル	男性	1976年	ウランバートル市第13学校	17
8. アルスラン・トゥメンデルゲル	女性	1978年	首都第23学校	19
9. エルデネバト ナンディンズルフ	男性	1976年	首都10年制第1学校	21
10. ムンフ アスラルト	女性	1976年	首都第50学校	23
11. ビリクサイハン ラクワチメグ	女性	1979年	首都10年制第40学校	25
12. ツェンベル ジャンガル	男性	1974年		27
13. ニヤムジャブ ノモンゲレル	女性	1976年	ホブスゴル県ムルン市 数学・自然科学学校	29
14. オヨン メルゲンブーベイ	男性	1978年	チョイバルサン市10年制第1学校	31
15. マダクマー トヤー	女性	1978年	ドンドゴビ・アイマク マンダルゴビ・ソム10年制第一学校	33
16. バルドルジ ザグドスレン	男性	1975年	ゴビーアルタイ県10年制第1中学校	35
17. オフナー オヨンサロール	女性	1978年	ドルノゴビ・アイマク ダランジャルガラシ・ソム8年制中学校	37
18. ヤンサンジャブ ナランゲレル	女性	1976年	アルハンガイ・アイマク エルデネボルガン・ソム10年制第一学校	39
19. ユラ バイガルマー	女性	1976年	ドルノゴビ・アイマク 医科専門学校治療科	41
20. エンフバト	男性	1974年	ホブド・アイマク ムンフハイルハン・ソム ”ムンフ・オルギル”株式会社	43

日本に思うこと

トブシントグス・エンフプレブ

ツォク外語大学日本語学科1年

良きことを祝福する気持ちのハダックで希望とされるの桜の花

月のソナタ、そして、しほりたての乳を太陽の国のあなたにまごころとともにここに奉げます。

1 初めて知った日本

子供の頃、私はいろんなことを知りたくてたまりませんでした。分からないことがある度に、「どうして?」と何十回も質問を大人達にあびせ、うるさがらせたものです。私達の世代は戦争を体験していないものの、本で読んだり人から聞いたりして、その悲劇が真に恐ろしいものだということがわかりました。しかしながら、私達は、戦争を経験し、克服した人の傍らでは何もできないのです。そして、このことを私は幼稚園時に習った「紙の鳥（折り鶴）」の歌から知ったのです。

…白血病にかかった可愛そうな少女
はかない祈りを込めて鶴を折り続けた
折った数だけ生きていられる
そんな昔の伝説を信じ続けた
千羽の鶴が折れたなら
どんな苦しみからも放たれると
世界中の子供達が
日本の少女に鶴を贈った

と、始まるこの歌で、私は日本という国があることを知り、そこにあった戦争と、その苦しみを初めて知らされたのでした。もともと、私の母方の叔母（モンゴル語、現在モンゴルテレビの記者、当時はモスクワ国際関係大学記者学科の学生であった）から、諸外国について聞く度に、アジアのいろんな国のことを知りたいと常に思うようになりました。彼女は「世界の大国である、ソ連、アメリカ、イギリス、フランス、日本、とくにモンゴルと近い日本の人々はとてもきれいで、本をよく読んでいる良い人達よ。でも、モンゴル人には日本の友人がほとんどいないの、ロシアの友人は多いけれどね。あなたが大きくなる頃には、私達はいろんな国の人と、友人になるでしょう。」と、言っていたものでした。私は、現在は日本と言えば“大国”であるけど、何十年か前には、敵国に爆弾を落として多くの人を殺した国だと、想像していました。やがて、私が学校に行くようになると、モンゴル側も戦争の際に日本人に危害を加えたというのを先生から聞きました。それを聞いて、一部の生徒はとても驚いていました。日本が爆弾で敵国の都市を破壊したという悲惨な出来事とは別に、ハルハ川で起こった戦いの、多くの忌まわしい出来事を考え始めるようになりました。そして、また私は大人達に「どうして?」と、尋ね続けました。この私の知りたがりの性格のお蔭で、良いことも悪いことも学びました。

今年、私は18歳になりました。新しいことを知ろうとして、日本についてのかなりの情報をどうやって集め、知り得たのかを記します。

2 独自に学んだ日本語

1991年の春に、私は8年生を卒業して、学校の卒業パーティーに行くために、ちょっと背伸びして、母の赤い毛織りのセーターを着ていきました。やわらかくて、暖かいそのセーターは、国産のラクダと山羊の絨毛で作られています。そして、それを作っている「ゴビ」コンビナートの工場は日本の援助で建設されたものです。正直に言うと、私は学生生活の初めの何年かは、日本についてそんなに興味を持っていたわけではありませんでした。しかし、学生生活も終わりに近づいてから、日本についての本を読んだり、映画を見たり、また人から話を聞いたりし、かなり基礎的なことから自分で勉強しはじめました。私達の国では、日本のことは良く知られていて、そのことが「ゴビ」工場建設に大きく影響を与えたと思われます。私達は親しみを込めて、大地に日が昇る東の方角にある日本を「太陽の国」、太陽を幸福のしるしとしている日本人を「太陽の人達」と呼んでいます。時が移り、人は真に自由になって現在、日本・モンゴル関係も、だんだん発展してきています。両国の国民は互いにより良く理解しあい、交流を開始し、相互に行き来し、協力しあい、親交を深めて、日常的に接する機会が増えてきています。個人的に言うと、私はある一人の日本の少女と友達になりました。札幌の「草の根会」という子供達の会の指導者である、佐々木さんは、モンゴルの子供達の「ナイラムダル（友情）」という名の避暑地で三年間続けて子供達と過ごし交流しました。私はこれに参加する機会に恵まれ、1991年に、佐々木さんや日本の子供達と、この避暑地で、短期間であったけれど、一緒に生活し、遊び、素晴らしい友情を深めることができました。また、言葉が互いに分からないという障害が、却って私達を親しく結び付け、互いに深く理解し合う機会となったのです。この佐々木さんは、何年も子供達の会で仕事をしていて、多くの生徒を持っています。また、約十年程前には父の知り合いの教師と、とても親しくしていたのだそうです。

3 あこがれの日本

私達の国にも、隣の二大国の経済システムより市場経済の主な流れが移ってきたので、ほかの先進国であるアメリカ、日本、イギリス、中国、韓国などの大国ともだんだん親しくなってきました。その結果、私達に様々な国の友人が増えてきました。私は、新しい友人達と交流を持ちたいと考え、今年から英語を独学しています。ロシア語のサークルで何年か勉強したことも、近隣の国の人達と交流したいと思うきっかけになりました。私達の国の諺に、「友達の多い人は草原のように広くて大きい。友達の少ない人は掌くらいに小さい」というのがあります。草原のように大きな力を持つためには、最も基礎的なコミュニケーションである言葉、外国語が重要です。私は後期中等教育を終えてから、外国語を学ぶことができる大学に入学したいと思いました。そして今、小さな頃から憧れていた、日本人が話している言葉を学んでいます。

東の空が白み

東から昇りゆく太陽に

思うは、近い東の国

想うは、親愛なる東の国

全ては御仏の子供達

日よ！ 月よ！

初めに東の国の人達と親しくなってから

世界中の人達と仲良くしてゆき、永久に幸せでいよう

はるか東の、太陽の国の往来に祝福あれ！

母なる青い惑星の

兄弟が互いに仲良く

モンゴルと日本の人達が

永遠に友人であるように

静まりゆく世界が

太陽の光に照らされて

心の朋友たちが

一生のあいだ幸せであるように！

幸福を祈り

九つの希望を実現させよう！

真の日本人はどのようにして 生まれるのか

ダシドルジ・ダシムンフ

モンゴル国立民族大学モンゴル学部

ジャーナリズム学科2年

幼い頃私は、富士という一年中雪を戴いている山、真っ赤な太陽をかたどった旗、そして護身術である空手道の三つのみで日本という国をイメージしていた。というのも実は日本について私の知っていることはそれだけだったのである。

しかしアジアについて学び始めた時に芥川龍之介の作品を読み、黒澤明の映画を見る機会があった。それ以後私は日本に関する様々なものを読むようになり、ようやく一つのことを理解したのである。

現在全世界がソニー、三菱、ヤマハを知っている。日本の社会、経済、産業は発展を遂げ、急速に進歩して世界のトップにたった。しかし私の考えでは日立、新幹線、JALのサービスやマーケティングといったことは真の日本の奇蹟ではない。真の日本の驚異とは、日本人が非常にユニークで他に類を見ない特徴をもっていることである。これは、自然と、日本人々と、社会との独特で密接な関係から生まれた結果である。この点において、日本人とモンゴル人は良く似ている。モンゴル人を霧のかかった谷や馬の姿を見ずに語れないように、日本人を満開の桜、広大な海、そして低く青い山々を見ずに理解することはできない。自然がこのように豊かで、自然との関係がこのように長い間保たれてきた国は多くない。

川端康成、松尾芭蕉を読み、北斎、歌麿を見て、私は「これらの底を流れる哀愁、温情、繊細さやひそやかさ、独特の素晴らしさや聡明さはどこからくるのだろうか」と自分に問いかけた。日本の素晴らしいこの世界を知りたいと思い、私はこれらと、思想、ことば、慣習、生活に根づいた道徳、哲学、そしてとりわけ自然との深い結びつきを学んだ。そのことについて述べたいと思う。

元旦の朝早く、日本の若者は初日の出を見るために山の頂上まで登る。日本人にとって太陽は人生に幸運や力や才能をもたらすものである。

このならわしは一見特別でも何でも無い。しかし厳密には単なるならわしではない。初日の出を見た人は太陽が昇るというのがどういうことか知る。この文字や絵では表すことのできない壮厳さをまず見、そして理解した人は、形に対する美しさ、神聖さ、畏敬の念が何たるかを理解する。一連の関係で結びついた自然を理解し敬うのである。

もしかするとこの関係から芭蕉の俳句や川端康成の「山の音」、師宣の絵が生まれたのかもしれないと思う。美の感覚は時代を経て伝えられているのだ。

月見、茶道、花見、おくんち祭り、盆栽、生け花などと密接な関係にある舞、能、歌舞伎や俳句、短歌、浮世絵、三味線の音は、日本人が昔から親しみ生活の一部であったものを芸術として昇華させ、自然と調和した生活そして思想を、途切れさせることなく強固な関係によって生じさせたよう

である。勿論、空手道や相撲、碁や着物なども同様である。

日本でもモンゴルでもアメリカでも太陽はそれぞれ昇る。日本で日本の太陽が昇るのを見れば、日本の美に近づくことが出来る。このことは日本人と桜、日本人と生け花、日本人と農地、日本人と海、日本人と富士山といったような何十もの関係を明らかにする。重要なのは日本の驚くべき特徴のあらゆる原理をつくり出したのが神道の教え、つまり宗教だったことだ。

自然と調和する心と肉体の関係を理解したものがそれを崇拝するのは当然である。真っ赤な太陽、真っ青な海、雪を戴いた富士山、薄紅色の桜がだんだんと北上して咲いていくことを考えなければ、日本人がどのような民族であるか想像するのは難しい。自然を愛する人間は生まれ故郷を愛す。そして国を民族を愛するのである。

まさにそのようにして日本の心を持つ日本人が生まれるのだろう。

この関係を壊すことのない労働と極めて厳しい原理や道徳が自在に変化しながら、日本の名を世界に知らしめたのだろうと私は思う。

妹を救った日本の鶴

ムンフバヤル・エンフトヤー

首都10年制第83学校数学課9年生

「弟か妹がほしいな」それが、私のたった一つの望みでした。「弟か妹を産んで」と母によく頼んだものです。しばらくして、母は赤ちゃんを身ごもりました。お乳を飲むかな？愛らしく笑うかな？それともおもらしをしてゆりかごを濡らすかな？…本物の妹を持つことに私はよりいっそう憧れの念を抱き、時には妹の夢を見て喜んだこともありました。

1987年私が10才の時、念願が叶い、兄と私の二人は妹を持つことになりました。言葉で言い尽くせないほど嬉しいことでした。

祖父は妹に「ブジンハンド」という可愛らしい名前をつけてくれました。ブジンハンドは今6才です。昔話をすぐに信じこんでしまうような愛らしい子です。

私は妹が可愛くて仕方がないので、妹をおいては、あまり外に出かけようとしません。今に至るまで避暑地に行ったことがないくらいです。

日がほとんど照らない日が続き、葉も枯れ、冷たい雨が激しく降った1989年の秋のことです。父と二人で刈取りの作業をしに農場へ行き、その後で叔母の家を訪れたのですが、その日はすぐに妹のところへ帰りました。というのも、ブジンハンドは病気になってしまっていたからでした。母は妹を入院させました。そして兄と私は祖父のところへ預けられました。

私は「妹をどうか救ってください」と仏様にお願いし、祖父とお経を読んで祈り続けました。

その時不意に佐々木貞子さんのお話が心に浮かんできたのです。母が話してくれたそのお話を初めて耳にしたとき、主人公の女の子が無性に可哀相に思えて鶴を折りたくなりました。でも実際には折り方がわかりませんでした。兄と私は絵を描いたり、切ったり貼ったりして紙と悪戦苦闘をしました。

私たちの様子を見た母は佐々木貞子さんの折った鶴が描かれている新聞記事をもってきてくれました。そのおかげで私たちはどうにか本物の日本の鶴を折ることができました。

「佐々木貞子さんをどうか救ってください！

どうぞ病気を治してください！

日本の女の子が100才まで生きられますように！」

口のなかでそう呟きながら鶴を折り続け…

父は4羽、母は5羽、兄は10羽、そして私は9羽折り…

家の中に遠い国のお話が息づきました。ずっと昔に生まれた人だというのに、人々の心に子どもとしてそのまま焼きついている佐々木貞子さんの夢を叶えるために、モンゴル人の一家族である私たちは鶴を折り続けました。

祖父は画家で父は美術の先生なので、私たちはこの手仕事が気に入りました。お菓子の包み紙や色鉛筆ぐらいしか集めていなかったのですが、私の宝箱に新たにはいることになった、その鶴は私

の一番の宝物になりました。近所の子供たちも鶴を折るのを覚えました。でも母の話してくれた佐々木貞子さんの記念碑にこの鶴を届けることも、その側をキラキラ輝きながら流れる川の水に浮かべてみることもできず、残念に思っていたのです。

「妹が助かる方法が見つかったわ、おじいさん！」私は思わず大きな声を出していました。

そして、兄と私は一晩中鶴を折り続けました。

鶴が10羽－佐々木貞子さんと妹のブジンに違いがあるでしょうか。一方は日本人の女の子。そしてもう一方はモンゴル人の女の子。

20羽－二人とも健やかに大きくなれることを心から願って。

35羽－貞子さんもブジンも弟や妹がほしいと思っている。

45羽－二人ともいい香りのする草花が生えている大地を駆け回りたいと思っている。

59羽－両方とも雲雀がさえずったり、小鳥たちがいい声で歌うのを聞くことが好き。

90羽－二人とも昔話や国語の教科書を読むのが好き。

100羽－この二人の女の子のどこが違うというのでしょうか。

早朝、その鶴をもって病院に行きました。私たちからの贈り物を見た母の目には涙が溢れるほど浮かんでいました。窓のところにつけた鶴をつると、ぱっと輝いて見え、心の中に日の光が射しこんだような明るい気持ちになりました。「妹は救われたんだわ」と思わず跳びはねました。

秋も暮れるとても寒い日に、母と妹は無事退院し父も農場から帰ってきました。

私達兄妹も袋いっぱいの鶴を担いで、浮き浮きしながら家路に着きました。

明るく、平和な或る日に、不思議な力を持った日本の鶴が私たち家族を救ってくれたのです。

このお話が私たちの子孫にまで語り継がれていくようにと心から信じて…

そして今は、目に障害のある友達のために「よくなりますように」と祈りながら妹と二人で鶴を折っています。

日本について私の知っていることである佐々木貞子さんについて、そして昔から伝えられているという千羽鶴についてはこれで筆を置こうと思います。海の向こう側にある日本について私はまだ殆ど知りません。でも、私にとって日本は、妹を救ってくれた千羽鶴のお話のようにとても親近感があります。

日本についてもっと知りたい、そう願っています。

チフ（耳）とホショー（鼻先） の会話

ガルサン・ボルドゥビルグーン

チフ：日本について誰が良く知っているかというコンテストが開催されたそうですよ。

ホショー：以前、作文部門では「日本国、日本人」という題目で、絵画部門では「私の知っている日本」をテーマにコンテストが催されました。又、「日本の歌を誰が上手に歌えるか」というコンテストもありましたよ。

チフ：きちんと予定通りに開催され、不正行為のないコンテストだったからみんな積極的に参加していましたね。

ホショー：組織だけでなく、国までもがコンテストを呼びかけても実際にはとり行わない場合が多いです。それに、とり行ったとしても我々を自分たちの国に招待するのを忘れてしまうような場合もあるよね。

チフ：日本は有言実行の国ですよ。こういうところがあるから日本という国の名は世界中に知れ渡っているんでしょうね。

ホショー：それじゃ僕は日本に関して知っていることを話しましょう。ホロー（指）、君は僕の話すことを速記してください。でも、縦文字（モンゴル文字）による速記ではなく、横文字（キリル文字）で書き留めてください。じゃあ、書き始めてください。まずモンゴルも日本もどちらもアジアの国です。両国とも「島国」です。

チフ：モンゴルが祖国だって聞いたことがあります。

ホショー：日本は日本海、太平洋に囲まれています。一方モンゴルはロシアと中国という2つの海に囲まれています。日本は、北海道、本州、四国、九州の4つの大きな島と沢山の小島から成り立っていますが、モンゴルは一つの大きな「島国」です。

チフ：人口はどれくらい？

ホショー：モンゴルは人口200万人の国です。でも、日本はモンゴルよりも1億2千万人も多いです。つまり、モンゴルの61倍です。でも、国土はモンゴルの5分の1です。ウランバートルは人口50万の都市ですが、東京は約1200万人です。

チフ：日本人とモンゴル人は、顔立ちや体つき、髪の色や性質に共通点が多いと聞いたことがありますが、本当なのでしょうか。

ホショー：どのような手段で渡ったかはわかりませんが、北海道に住んでいるアイヌ民族の先祖のように、日本人の中には、かつて大陸から日本に渡った人たちの血が流れています。それらの先祖はモンゴル人なのです！

チフ：確証はあるのですか。

ホショー：モンゴル人と日本人の新生児のお尻には手のひらほどの青い痣があります。それを「蒙

はこのことを高く評価し、両国の発展を考えていくべきでしょう。

チフ：モンゴルと日本の歴史上の悲劇と言えば何ですか。

ホショー：日本には、ごく普通の平和な2つの都市がアメリカによって原子爆弾の実験台にされたという歴史があります。モンゴルのほうは、私たちの先祖が「封建主義社会から社会主義社会への移行」の実験台になりました。今後、このような実験がされてはいけません。私達にとって重要なのは、共に助け合い、働き、発展することなのです。

チフ：祝詞を言ってください。

ホショー：銃を手にして戦った我々が

共に歌を口ずさみながら未来を目指せますように！

いろいろな分野の「天分」が集積された1高校生であるG・ボディビルグーンが少ない知恵を絞ってこれを記す。

日本について聞いたことを、この度私は「チフ（耳）とホショー（鼻先）との会話」仕立てにして記したが、日本を実際にこの目で見た暁には「ヌドゥ（目）とズルフ（心）」の2人の会話にしてつづってみたい。

太陽の娘―桜

エルデネチヨローン エルデネトルガ

ウスブリーン創作中央学校3年

桜の花は、太陽が地球に近づきつつあることを告げ、地球上でまず最初に日本で花を咲かせ、人々を春の喜びに会わせてくれます。だから桜を、一夏の花々、暖かい季節、外国からの来客・旅行者、大収穫の喜び等を従えてやって来る、喜びの花、と呼ぶことができます。僕は作文に、「桜よ、永遠に花を咲き誇らせよ」と名付けて、桜の5つの花びらという意味で、5つの作文を書きました。5つの花びらが合わさって1つの桜の花となり、あなたがたみんなに、喜びが届きますように。

僕の5つの花びらは、「太陽の娘―桜」、「物語を忘れないでください」、「時間とスピード」、「笹川老人と子供たち」、「地球は何色か?」と言う名前です。5つの花びらは、日本についての15才の僕の考えです。

物語を忘れないでください

僕は小さい頃、幼稚園に通っていました。僕の幼稚園では、子供達や先生みんなが、紙で鳥を作っては飛ばしたものでした。紙の鳥を日本の方へ向けて、原子爆弾の後遺症に苦しんでいた、1人の少女のもとへ飛ばしていたのです。その女の子は10万羽の紙の鳥があれば病気から助かる、と母が言っていたものでした。これは、私の母が語った善意についての物語です。今考えてみると、あの鳥達がみんな鶴となって、日本へ行ったならばよかったのになあ、と思います。鶴だったならば、物語は幸せに終るはずでした。なぜかというと、鶴は日本では、幸福の鳥として喜ばしいものだからです。だから幸福な人は釧路へ行く、と言う話ができたのでしょう。釧路のトメおばあさんは、鶴を育てて、数カ月前には100羽ぐらいしか生息していなかったのを、500羽に増やして幸福になったのでした。だからこそ、トメおばあさんのように、面白くて素晴らしい人達の人生が、幸福の物語として残っているのでしょう。

僕は世界の子供達と同じく、物語が好きです。そして物語について思う時、「物語を忘れたならば、母親の教えをも忘れることになる」という言葉を、いつも思い出します。

時間と速度

人は生き物の発展を、速度によって測ります。日本の子供達は、発展のこの速度の輪の中心にいるのです。彼らがそれまでの発展の速度に追いつこうと、すごい勢いで勉強に励んでいることを、私は知りました。彼らは夏にたった1ヶ月間しか休みません。人間は寿命を持っているからこそ、生きている間に過去何世紀もの発展に追いつき、それをもとにして、未来のための多くの新しい発見をすることができるのです。

日本人の素晴らしい資質について述べた本では、「日本人は、ある本質的な、新しいことを試みずにはいられない」と書いてありました。この資質によってこそ、19世紀には多くの面で遅れてい

た日本が、世界の発展にたった一世紀の期間で追いつき、それだけでなく断然のトップになれたのです。これが速度です。たどった道のりを期間に分けて学ぶ資質を、作文コンテストの過程において見つけたことは、私の大きな幸せです。

笹川老人と子供達

歴史の発展は、過去の祖先達、現代の人々、未来の子供達といった3つの名称、3つの時代の中にあります。この3つは互いに非常に関係が深いものです。もしモンゴルの子供の避暑地に日本の子供達が来たならば、休んでいる人達は皆、彼らと知り合いになろうとするでしょう。日本の子供達は、どこにいても大変有名です。彼らのその大きな名声は、先祖が築いたもの、習慣が支えているものです。そして人類の明るい未来を更に明らかにするならば、未来は子供達の方に向かっていることがわかります。私たちの国には、「子供を大人にしてあげる電車があるならば、みんなでそれに乗ろう」という歌詞の歌があります。この歌を私は笹川老人に捧げています。もしそんな電車があったならば、笹川老人はもっとも尊敬すべき客人となることでしょう。僕は「人民アヨージ」通りを通して通学することを誇りにしています。彼を誰も越えることはできません。9つの拷問を乗り越えた英雄なのです。彼と同じく世界の子供達を愛する笹川老人を、日本の子供達は誇りにしているのでしょう。こう考えてみると、子供がどんなに遠くの、どんな国に暮らしていても、その祖先の時代が母国を支えていることがわかります。子供は祖先の築いた時代を尊重し、それと共にあるのです。

地球は何色か？

地球に大きく強い光が射してきました。その方角を人々はみんな見ました。世界の光を持つ太陽がゆっくりと上がってきました。人々が見ている太陽のその端に私の作文の国、日本があります。モンゴル人は、地球の太陽を日本人より3時間遅く、同じように見ます。このように、地球で太陽を最も早く見る人は、日本人なのです。

太陽が上ると空は淡青色に、大地は緑色に区別され、海は紺青色に波立ち、建物は白や黄色の様々な色になり、地上は虹のように色とりどりになりました。太陽が万物を染めてしまったかのような、世界のこの素晴らしい色達を、日本人は地球で最初に見たのです。だからこそ日本人は太陽を尊重し、太陽の国と名付けたのでしょう。朝日を迎えるのが好きな人は皆、東の方向を見ます。21世紀は西側世界の世紀です。まもなく世界の人達は、その発展により驚嘆の眼差しを受けている日本の方向を、太陽を迎えるが如く注目するようになるだろう、というのが僕の考えです。

僕の考え：5つの花びら—5つの考え。子供が祖先の時代を愛するならば、子供が学問に励むならば、子供が母親の教えを守って生きるならば、子供が母国を誇りにするならば、子供が美しいものを尊敬するならば、国家は日本のように急速に発展し、桜の花の咲く如く栄えることができるのです。

理想の素晴らしき 太陽の国

ダシドンドギーン ボロルゾイ

ウランバートル市10年制第一中学校10年

ぼくの趣味は写真を撮ることです。一度、テレルジの岩山へふらっと遊びに行き、写真を撮って帰るとき、突然激しい雨が降ってきたことがありました。道に一台の車が止まっています。タイヤがパンクしたのでしょうか。近づいてみると、知らない人たちが「こんにちは」と言って、手を合わせてお辞儀しています。日本人だと言うことが分かりました。子供の前で何度もお辞儀をする大人を、私は見たことがありませんでした。私は感激して、タイヤの下にある石を引っ張って手助けしようと、頑張りました。

電混じりの雨も気にせずに辛抱強く作業をしている彼らを見ると、我慢強い人達であることは一目瞭然でした。私の好きな「浦島太郎」の表現からすると、日本人は一般に小さいときから、困難を克服する意思の強い人に育てられるのでしょうか。

例の数人は深く腰を曲げて、「ありがとう」と言いながら行ってしまいました。私も「こんにちは」、「ありがとう」という二つの言葉という収穫を得て、家へ帰りました。人間関係で最も必要なその二つの言葉は、日本人を理解するときの鍵にせよ、と考えるようになりました。

太陽の国について私は、真っ青の空や、新聞記事、旅行に行ってきた人の話から知っているだけでした。本当に豊かで素晴らしい国のようです。伝説のロス王の国とは日本のようなところなのでしょう。

太陽の国と言うと私たちには、太陽、海、船、竹、桜、着物が心に浮かびます。私の友人達も同じようなことを思い浮かべました。まだ日本について知っていることは少ししかありませんが、もっと様々なことを知りたいと思います。「百聞は一見に如かず」というように、日本をこの目で見て、写真を撮り、ルポルタージュが書けたらなあ、と願っています。

ガイドブックを見ると、日本は、私達の国の4分の1ほどの小さな島で、人口は約100倍とあります。進歩の点では軽く1000倍はいくでしょう。いかにして彼らは、「日本製」と記された製品で世界を征服するに至ったのでしょうか。

小さい頃、父は私にいろいろな国のおもしろい物語を読んでもくれたものでした。その中の一つの、日本の物語を覚えています。昔、ある老人が年老いたので、最も高価なものを見つけてきた者に自分の財産をやる、と言って、3人の息子を遠くよその国へいかせました。下の二人は町で穀物や絹、ちりめんを買って手にいれます。長男はどんどん進み、大きな川にたどり着いたそうです。その先には肥沃なとても美しい土地が見えました。そこにたどり着くための橋を作っていると、家へ帰る時間になってしまい、お金も尽きてしまいました。ところが最後の夜、夢に老人が現れ、振るやいなやお金があふれてくる財布、背中を叩くやいなや年をとっている人を若返らせる杖をくれたのです。

父親はどこにでもあるものを買ってきた二人の弟ではなくて、富を増やすことのできる宝物を見つけてきた長男に跡を継がせ、財産を相続させました。

物語を通して論されていた先祖の賢い考えを日本人は理解し、そして今日のこの高度な発展に至ったのです。他人から、穀物ではなくその種を蒔く方法を、絹ではなくそれを作る知恵を得たのです。日本の発展の秘密はここにこそあるように思われます。

誰か魔法使いが僕に、振るやいなや金貨があふれてくる財布をくれるならば、そのお金でなによりもまず、日本を大陸と結び付ける橋を作ります。昔から太陽を信仰した両国の人々は、その橋を使って往来し、知り合い、親しくなるのです。その人々を通して、豊かに暮らす方法が伝わり、モンゴルの疲れきった人々を救うでしょう。

もし僕が物語に出てくる魔法の杖を持っていたならば、僕の80才のおじいさん、おばあさんのように、孫のためだけに生きている各地のお年寄りの背を叩いて若くしてあげます。世界の子供のために善行を施し、最も尊い徳を持った、笹川老人のような善行者や老人達を叩いて、もう一度子供にしてあげます。

真面目に働く人々、高度な発展、徳を積んだ老人達、理想の、素晴らしき太陽の国について僕は以上のように考えています。

日本についての 私の考え

ダシニヤム ビャンババータル

ウランバートル市 第13学校10年

草原の主であるモンゴル人の私がめぐらせる、陽が昇る東方の日本に対する漠然とした想像の糸、稚拙なイメージを述べましょう。

さざなみが揺れる穏やかな海から、静かに昇る太陽。太陽の国の朝の始まりは、このような感じ です。太陽の暖かい光が富士山のすそ野を暖めるとき、桜の樹々は目を覚まし、水色の海面をかもめが飛び回るとき、琵琶湖の鶴は羽を整え、軽やかに飛び回ります。そこでは水平線と海がつながる、遥か遠くが見渡せます。でも、きらびやかな町の果ては見えません。その最も発展した国では、かわいい少女が白い鳩を育てています。その最も生産力のある国では、優秀な若者が汗を拭う暇もありません。ぶらぶらと暮らす人は居らず、仕事に精を出して絶えず競い合っています。教養の最終点にたどりつくべく、生活をこれに捧げています。天皇は、人々が懸命に努めることを尊重していることが、ぼくにはわかりました。常に忘れずに、頭に叩き込んでおきたいと思います。

過去の歴史を変えた言葉がこれです。

「祖先達がいつもとやかくいっただけの出来の悪い息子なんです、ぼくは。祖父母がいつも非難する馬鹿な少年なんです、ぼくは。けれども、歴史の汚点を忘れずにいることは出来ないし、だからといって腐敗させて目をそらし、無くしてしまう必要も要求もないのです。」

私の祖先は13世紀に日本を侵略し失敗しました。あなたのおじいさんは1939年にわが国に侵攻し、力を発揮できませんでした。1960年以前に戦場にいった軍人は、激動の1960年以降の運命を知りませんでした。うちのめされ泣いているときには、敵と挨拶を交わすことなど夢にも思いませんでした。そうです、過去の過ち・虚偽を、その結果として当てはめるわけにはいかないし、遠い親戚に対しての恨みを胸にしまって、嫌な思いをする必要もありません。恨みを恨みで晴らしてはいけません。恨みはただ友情でのみ晴らせるのです。

おばあさんが私に話してくれました。「ああ、あの戦争は物が無い時代で、いや、本当に辛かったねえ。おじいさんは行ったまんま消息が無いし、お前のお母さんは生まれたばかりで揺りかごの中だった。時々行方が知れると、日本と戦ったという話でね。ロシア軍が援軍に来たという話もあったね。そうそう、晩秋の霜の降った朝、旗をはためかせながら車で、お前のおじいさんは帰って来たんだよ。いいやあんた、そのときにロシア人たちは『モンゴル人は後進、我々は前進！』と口々に言っていた。じいさんは顎を引いて、そのロシア人達に銃の照準を定めたそうでね。だからロシアとは仲が悪くなって、日本と関係が良くなるのは、良い前兆なのかね、悪い前兆なのかねえ」と。

「ああ、おばあさん、今は違うんだよ」と僕は現代のことをかなり話してあげました。おばあさんはしばらく聞いてから、「だめだめ、お前は私に教えることなんか出来ないんだから」といって立

ち上がりました。銃弾の傷に苦しみながら死んだおじいさんの写真の前で、ろうそくに火をつけているおばあさんが、僕の言葉を分かってくれるとは全く期待できないことに、不満を感じながらもそれを責めることも出来ませんでした。過去の心に変え深くしみこんでいるもの、それは戦争です。

草原の主のモンゴル人である私が、まだ知らない、日本の皆にこう言ひましょう。

こんにちは、と私は挨拶を交わしたい。ようこそ、と言って人を招待したい。嗅ぎタバコ入れを交わして挨拶をする習慣はモンゴル、手を合わせて頭を下げる習慣は日本。あぐらをかいて話をする習慣はモンゴル、足をおりまげて正座しながら話す習慣は日本。山、草原、砂漠が調和した、穏やかな広い大地はモンゴル、広い海の波の上に、数え切れないほど多くの島があるのが日本。平原の如く広い、人々の心はモンゴル、五大陸にその名をはせる人々の英知は日本。各々が韻を踏んで語るのが私たち。各々の願いを実現しているのがあなたがた。特にあなた、僕たちが一緒に仲良くなって、働き、勉強し、研究するのはどうでしょうか？さらには、兄弟になれたらどうでしょうか？おめでたいやつだ、と笑って、そうしよう、と賛成してくれますか？

モンゴルには、兄弟になるとときには大切な物を交換しあう、という昔の祖先の習慣があります。偉大なテムジン（ジンギスカン）はジャムハ（遊具）とシャガイ（遊び道具）を交換しあった、という伝説があります。それでは、私たちが交換しあう物は、平和の尊さと熱い情熱にしましょう。熱くたぎった心の約束を、この文章で掲げましょう。大切な兄弟と出会う記念に、祝詞をあげましょう！

日本の慣習について

アルスラン・トゥメンデルゲル

首都第23学校9年生

日本の子どもは目上の人を敬う慣習をゆりかごの中にいるときから、つまりごく小さいときから教えられています。母親がしっかりと背中におぶったり、又年長者に対して丁寧にお辞儀をするという姿を見ることにより、子供たちは目上の人たちを敬うことを学ぶのです。

このように、日本人は目上の人を敬うしきたりを本などから得る知識からだけでなく、心や体で実際に感じ取りながら覚えていきます。母親が父親に、年下の弟が年上の兄に、又女性が年齢に関係なく男性には皆お辞儀をする姿を子供は目にします。これは単なる形式的な儀礼ではなく、自らの立場を認め、受入れ、それに伴って課せられる責務をいつでも負う事ができるということを示しているのです。

日本では、家長は如何なるときにおいても一番優遇されます。家族全員で家長を見送り、そして出迎えます。家長には一番良い食事が出されます。お風呂にも家長を一番先に入れます。

子供たちの中からは、年長の子供が跡取りになります。年長の子供は、後に老いた父母の世話をしたり、家族みんなや先祖の跡を次ぐ責任があるので、家では優遇されます。年長の子供は大きくなると父親と一緒に家の中の問題について考えるようになります。

遺産を相続する男の子がいない家では婿を迎え入れて跡継ぎにします。婿養子になった人は妻の姓を名乗り、義父母を実の父母のように敬います。日本の家庭では、他家に嫁いだ実の娘との関係よりも、嫁や婿との関係のほうが親密になります。

日本の慣習では目上の人を敬うことが最も大事だとされています。「子をもって初めて知る親の労」という格言があります。両親を養い敬うという意味で、目上の人を丁重に扱うということは人の身に付けるべき慣習の最も大事な点であると思います。

感謝をするという日本人の誠実な性格は、家庭における「OYA-KO（親子）」あるいは「父子」の関係を強固なものにするにとどまらず、師弟関係や、扶養者と被扶養者との関係においても重要となっています。家庭や共同体、又会社では、非常に誠実であることが要求されます。モンゴルにも年長者を敬うという面において様々な習慣があります。モンゴルでも「人には年長者がおり、衣服には襟がある」と言う古い格言によって年長者を敬う慣習を子供たちに教えていますが、日本のほうがより特有であり、礼儀やしきたりを重んじ、道徳的に模範となるものが沢山あると思います。

また、日本人は自分や他人の名誉や地位を非常に重視します。日本人は自分に課せられた仕事以外の仕事を課せられるのを嫌がります。「自分のすべきことだけをすれば良い」といった教えがあります。これには、「分をわきまえよ」という意味と、自分よりも地位が低い人がすべき仕事に首を突っ込むと名誉や名声に傷がつくという2つの意味が含まれています。具体例を1つあげましょう。日本の新聞社に翻訳者として勤めている或る一人の外国人が急ぎの翻訳の仕事を終えて印刷所に持っていくことになりました。ところがその途中、階段のところで丁度印刷所のほうへ向かって

いる同じ職場の上司と遭遇したので、「印刷所のほうへ行くのならこの記事を業者の人のところに持っていってくれないか」と頼んだそうです。ところが、彼に依頼されたその日本人はこれに対し声もなく、その場にじっと立ったまま階段も下りなかったそうです。「お子さんが2人もいるくらいの年配の方にどうしてそんな振る舞いをしたのか。あなたの翻訳した記事は普通郵便で印刷所に送ったそうですよ。その人の年や地位を良く考えたらどうですか…」と他の日本人に言われて初めてその外国人は理由がわかったそうです。

日本人は相手と面と向かって口論することを好みません。又、一方が相手を完全に負かすことをしません。負けたほうの人の名誉を、他人の前で侮って傷つけてもいけないとされています。さもないければ、人の名誉のもろい一面を刺激することになり、一生その人といざこざを起こしたままになってしまうからです。

日本人は、人から助けを借りるのも、人に援助の手を差し伸べることもためらってしまう傾向にあります。これは別に彼らが冷たい性格の持ち主だからというわけではなく、知らない人にものを頼めば揉め事が起きるのではないかという警戒心があるからです。

「世の中をうまく渡っていきたいと思うなら自分の名声を大事にせよ、いい暮らしをしたいと思うなら服を正せ」とモンゴル人がいうならば、日本人は「礼儀を守れ、礼儀正しい行いができなければ世間では認められない」という不文律をくどいくらい重んじるでしょう。日本の慣習に関する私の考えは以上の通りです。

日本の空手の すばらしさ

エルデネバト ナンディンズルフ

首都10年制第1学校

全世界をわけへだてなく見守る太陽が朝になったことを知らしめ、南のアジアを目覚めさせ、4つの島からなる国の国旗の威光は上天の太陽と競いあって光っている。

毎朝の習慣で東京の通りを散歩していると、「はじめ」と命令する声がひびいてきて僕の注意を引いた。声は、池袋の方から聞こえてきた。館長の大山倍達先生だと思えば、話し合っただけで一緒に過ごしたあの時の思い出がうかんできた。

「私は1923年の7月27日に東京で生まれ、13歳の時に拳法道場に入門して2年後初段をもらって以来ずっと空手とつき合っている。2段を17才の拓殖大学在学中に取得できたのは、船越義一先生の弟子になったおかげである。空手を学ぶときは、目的を持つこと、良き師、大変な忍耐が大切であり、このことの体現がわが師匠、卓越した空手家船越義一先生を創立者とする正道館空手である。

わが師匠は88才の全生活を空手に捧げ、その哲学、伝統、決まりにのっとり技、および型を綿密に調べて分析し、研究して成熟させられた。

最初の空手学校を開き、正道館という名を採用したのは、それが先に述べた空手の強い流派であったからだ。モンゴルの『弟子の教育は師匠より』ということわざをここにあげるのには意味がある。偉大な先生を模範として、私が極真会空手という流派を開いたことは、空手を学んだことの意義を有し、よりよい例となるだろう。極とは極み、真とは本当の姿、会とは会う、空とは何もない、手とは手という5つの言葉をつなげて『究極の真実のための素手で戦う』という教えであるのだ。この流派の特徴であるカンフーは『全権の空を映す』という意義から生じた形である。私が若かった頃、千葉の清澄山に1年半一人で修行した後、肉屋で働き、屠殺牛を素手で打って、全部で47頭殺したが、そのうちの4頭を楽々と殺すことができたのだ。一方で、明らかに同等の力の体重50kgのカンフー師範に敗北したことがいまでも忘れられない。22歳の時、東京で、『アイワ空手道』研究所を設立し、24歳のとき、国の最初のチャンピオンとなったことがついこの前のことのように思われる」と大先生が語った話を思い出し、自然に私の考えは続いていった。

人は空手と聞くと、白い服を着た者が、自分より重く固いものに驚くべき力で勝利することを思い浮かべるが、本当はそうではないのだ。空手というのは、人の身に付けるべき清らかな道徳、大河の如き力、うなる虎の如き勇氣、光る稲妻の如き速さを持つようになり、また弱気をくじく事なく、おろかな決定を下す事なく、まさに『涅槃』の境地を愛するものなのである。

まさにこの境地が空手を生んだ国である日本の遺産、大いなる学問として強く切望されている。

僕の知る日本とは、高度成長、金ではかえられない人の性質、小さな体でも圧されない空手術、年長者を敬う思想、さらに民族の誇りである。

馬のたてがみの上に立って生まれたモンゴルの祖先の子孫である僕は、5～6メートルほど桜の木立ちの間を歩く。桜を信奉する日本民族の申し子、西行の『桜の花を見つめれば、心が浮かれ体より離れて花のほうに染み込んでとける、我』という言葉はなんと神聖な思いであろうか。

『花々の王』であるこの桜の花、僕の頭上の厳かさはあらがうこともできずゆれて、心を動かし、た。こんなすばらしさを見て、感動した僕は、海の国日本の急成長した発展を祝して、

昇る澄んだ太陽の如く

思考よ明晰であれ

炎の如く燃え上がり

3世代に渡って繁栄せよ

国のあらゆる地域の

国民の結束が固くなれ

と祈って、部屋に入ってお茶を飲んだ。

私の知る車力村

ムンフ アスラルト

首都第50学校

モンゴルの歴史書にある、リーベンという名の日本国について私は何を知っているんでしょう。21年前のモンゴル・日本間で外交関係が成立した年の3～4年前と言え、この国ははるか遠いほとんどほかの星の国のようでした。しかし今や、日本については多く話され、書かれ、人々が往来するようになりました。私の家でも、父が日本に10日程仕事で行ってきたことがあります。それで、私の家には日本のおもちゃ、案内書、さまざまな人々の名刺、雑誌、本があります。こうして私はこの素晴らしく、興味深い国についてすべては分からないまでも、少しずつ知り、理解し始めたのです。例えば、青森という県に車力という小さな村があることを私は知るようになりました。「水滴がどんなにわずかだと言っても、それには海の味と香りがする」、と言う言葉があります。そこで、太陽が昇る方角の大海に浮かぶ国、日本をこの小さな村からでも理解できると考えました。車力村は3000人あまりの人口を持つ小さな村、といっても独自の興味深く誇るべき歴史をもっています。日本の主要かつ大きな島の一つである本州の北の端にあるこの村の歴史は117年前より始まりました。それ以前は海岸の高くなったこの地域には黄白色の砂地がひろがっていました。勤勉な日本人達はここに植林し、野菜を植え、そして車力村の歴史が始まったのです。

今では、そこには森が生い茂り、米・大豆を植えた広い畑が開けています。栽培された果物、野菜の収穫物は東京都に送られるそうです。考え方によっては、車力村がなければ、東京都も存在しないというわけです。この歴史は、車力村の人達の勤勉な性格を物語っています。また、村人達の親切な性格を物語るこんなエピソードもあります。1889年、即ち104年前に、この村のそばでアメリカの大きな船が沈没し、かろうじて4人の水夫が生き残りました。海の冷たい水に凍えて意識を失っていた彼らを、車力村の女性達が体温で暖めて命を救ったのです。現在、船が沈んだその湾のそばの高い丘の上に、船水夫達の記念碑がそびえています。アメリカの観光客、青年使節団がそこを訪れ、記念碑に花を捧げ、この村と常に関わりを持ってきました。また、この村はモンゴル国のウムヌゴビ・アイマクと直接関係を持ち、代表を交換しあっているそうです。ウムヌゴビ・アイマクの7人の若者が、その村に4カ月も滞在したのは、村人達の、厚い好意によるのでした。その7人の若者は、米、野菜を植える方法を学ぶと同時に、モンゴルについて、モンゴルのゴビ地方について、村人達と知り合いになって、話をし、お互いよく知り合うようになりました。また、車力村からは、10人ほどの人がモンゴルに来たそうです。なかには2回も来た人もいます。このことは、モンゴル、日本両国が親密になっていることの一つの例でしょう。また、日本とモンゴルの人々のもてなし好きで、いんぎんな性格のあらわれであるでしょう。今日、我がモンゴルの人々は、日本を驚きのまなざしで称賛し、我が国もこのように発展させたいと願い、私達子供もそのように思っています。しかし、残念ながら、思うほどには、我が国が発展していないのは明らかです。ですから、進歩し栄えるために先進国を細部にわたって知ることは重要なのです。そのためには、両国のリーダーも

子供達もお互いに知り合い、理解し合う必要があるでしょう。日本の代表として述べてきたこの小さな村の過ぎ去った歴史を現状から見ると、何よりもまず、彼らの勤勉で優れた性格を誇らしく思うべきだと思います。次には、人を大切に思う心、礼儀正しさを誇りに思うことができるでしょう。おそらく、主にこの二つの性格のおかげで、日出づる国、日本国は発展し、驚くべき高度な成長を遂げたのでしょう。

モンゴルの一介の学生である私が、日本について何を知っているのだろうと自問して、できる範囲で答えようとする、このようになりました。日本の紹介、歴史、統計上の数字などは辞書、本にすでに書かれているので、それら全てをここに改めて書くことは省略させていただきました。

日本についての 私の考え

ビリクサイハン ラクワチメグ

首都10年制第40学校

1. 日本について初めて聞いたこと

1985年夏、ウランバートルから避暑地に行こうとする途中、セルベ川の右岸に白い柵の小さな囲い地が見えたので、私は父に、

「あれは何？」と聞くと父は、

「あれはハルハ河戦争で捕らえられた日本兵達の墓地だ」と言いました。その時より、私は、日本という国はどこにあるのか、なぜ、日本兵達の墓がモンゴルにあるのかなど多くのことに興味を持つようになったのです。

日本について、私が目にした2つ目のものは私の家にある円錐の形に万年雪を抱いている、威風堂々とした山の写真です。これは富士山といって日本人が敬愛し、信奉している聖なる山だと私は聞きました。

2. 日本人を好きになったこと

セルベ川岸にある墓地のいわれを聞いてからは、遠くの日本を『残忍な悪人の国』と思うようになりました。しかし、12歳の時に『広島石』という日本の映画を見ました。映画では、まず新聞記者の若者が原爆について書くために広島に派遣されるところから始まります。原爆投下によって都市及び何キロメートルも遠くにあった全てが被害を受けました。記者は広島若き女性と恋に落ちましたが女性は全身に原爆の爆発によるやけどのあとが残っていました。若者はそのことを知ってその女性をますます愛するようになりしました。しかし女性は自分の将来を医者に聞いて自殺します。記者の若者は嘆き悲しみます。広島すべての石を握ると、砂になるくらい細くなるのです。

私は、日本人がどんな悲しみや苦しみを味わったかということを知ってから、彼らを身近に感じるようになったのです。原爆の後遺症で病気に苦しんでいる小さな日本の少女のことを聞いて同世代の女の子達が鶴を作って苦しみを和らげようとしました。民族作家Ts. ダムディンスレン氏の『日本紀行』という興味深い作品を読んで日本人が平和のためにどれほど大きな戦いを繰り広げているかを理解したのです。1945年8月6日の朝8時15分広島市でアメリカの原子爆弾が爆発し、一瞬のうちに24万人の人が灰と化し、15万人の人が傷つき、6万人が行方不明となりました。なんて恐ろしいことなのでしょう。

広島に60万人の人々の名前を記した（遺体と言うべきものが残らなかった）記念碑があるそうです。その碑を見たとき、何が心に浮かぶのでしょうか。

3. 遠い、されども心が通う日本

モンゴルの正月の一日に私の父の教え子で大学院生の木村理子お姉さんをわが家に招待しました。モンゴル語で私たちのように話せ、我が民族の習慣に精通している尊敬すべき人です。本当に、モンゴルを愛している人だと思います。モンゴルの映画を研究し、学問などを守るために来たこの日本女性と知り合って私は日本人の心を理解するようになりました。6歳の時に初めて耳にした日本という国の人と間近であって、日本とモンゴルの人々は、顔つきが同じというだけでなく、心情も近いと言われていることをその通りだと思いました。

今日、日本人は、モンゴルに援助金を出す国々の団体を設立してモンゴル人を援助し、「元朝秘史」を研究し日本語で翻訳・出版し、小貫さんはモンゴルで『ゴビ』プロジェクトを実行し、バヤンホンゴル県で家畜を飼い、モンゴルを研究しています。

700年前ほど昔のフビライ・ハーンの軍が船で日本に向かっていった時、嵐によって皆沈んでしまったと言います。海のその猛烈な嵐を日本人は神風という護神とみなしていました。海の底に失ったモンゴルのパクバ文字のコインを確認していると新聞で読みました。1939年に日本軍がモンゴルの東の国境を攻めてきて、何カ月も戦って私達は勝利したと歴史の本にあります。13世紀の時代のモンゴル軍の遺体が日本近海の海底に今も眠っていることがわかっています。過ぎ去った歴史はこのようなでしたが、今日では、東京にチンギス・ハーンについてのモンゴルの映画が上映され、ウランバートルの通りには桜の花が咲き、日本の平和の鐘が響く音がしています。

未来をあなたに、

おはようございます！

おはようございます！（モンゴル語で）

紙の鶴

ツェンベル ジャンガル

何年か前、私は両親と一緒にモスクワで生活していた。そして日本のある一家族が私達と共にベルナドスキー大広場の93番棟で生活していた。その家庭には子供はいなかったが、一匹の愛らしい小さな白い犬を飼っていたのを私ははっきりと覚えている。

私の母国で、民主化革命の勝利が果たされなかった一党独裁の時代には、日本は私達の敵であった。彼らのように残忍でわがままな恐ろしい人々はどこにもいないという認識が、私達子供の脳裏から離れず、日本の人々を他の星の人々のように思っていたものだった。そんなある日、その日本人一家の主人が外で飼い犬をなでていた。私がその愛らしい犬の背中をなでると、飼い主は喜んで私を家に招いてくれて、様々な色のガラス玉をくれた。「こどもはどこでも同じ」とその心の美しい女性は私に言った。

日本人は他の星の人々ではないし、私達の敵でもない。それどころか私達と同様に慈悲ある美しい心を持った人々であるということを私は悟った。私はその時以来日本語を学びたいと思うようになった。これは私のもの好きな性格のためではない。日本は現代の電気、科学技術において、世界で有数の先進国である。研究する知恵、技術の前進において、ぬきん出ている国の一つだ。日本を「アジアのアメリカ」と呼ぶこともあり、一部をみればアメリカより優れてもいる。

私はまず目標をおこうと考えるようになった。今、私は基礎を大学の日本語学科で学んでいる。

日本では、「さくら」がどこで咲いているかを日に何度もラジオ、テレビで報告するというところを読んだ。これは平和を望むものが多く考えることである。

我が民族が「元朝秘史」を創ったように日本の人々は「源氏物語」という素晴らしい小説を10～11世紀に創った。その本を私は母国語で読むことを期待している。

「黒部の太陽」、「新しい日本に到る道」という私の見た日本の映画で、モンゴルと日本の人々に共通の行動様式が多くあることに気づいた。

その行動様式を考えた時、思い出したことがある。モスクワで開かれた日本の原爆写真展で、一人の日本の女の子がそこに来た人全てに桃色の紙の鶴をあげて核戦争反対を訴え、署名を集めていた。

日本人の一番大切にする鳥は鶴だと後で私は聞いた。病気の人に千羽の折り鶴を折ると病気が治る、と私の日本の友人が話してくれた。紙を折って、様々な形を創るのは日本の折り紙という特有の芸術である。中世の時代からはじまるこの芸術を日本人は習得しながらうけついできたと本で読んだことがある。13世紀には折り紙についての本まで出版されていたそうだ。

富士山の上の方に鶴が飛んでいったら幸運が生まれ、望んだすべての事が実現するという私の考えは、日本の人々が実際に言い伝えてきたことだったのだ。話を元に戻して、日本の原爆写真展で会った女の子について記したい。

日本の女の子が桃色の紙の鶴をくれたので私はその鶴を今までお守りとして、保管してきた。な

ぜならば、日本の子供が私に幸運、喜び、優美さを望んだからだ。今、私はその鶴を日本の友人、知り合い、そしてあなたたちすべてに送っている。

私の折り鶴よ。よみがえり、伝説の美しい富士山の上を飛んで私の近所にいたその心の美しい日本人に、また私達に、この鶴を最初にくれた女の子にとどいてくれ。私もあなたたち全てが幸福になるよう望んで永遠の青い空の国から誠の心から歓迎の気持ちをつのらせている。

日本人

ニャムジャブ ノモンゲレル

ホブスゴル県ムルン市数学

・自然科学学校9年生

「世界」週間で、「日本の奇跡」について詳しく知るようになりました。日本についてはよく知らなくても、「日立」、「トヨタ」などは、モンゴル人でもすぐに分かります。私の父は「オムロン」、私は「シャープ」の計算機を持っています。日本人がしたことを賞賛するだけの人がかなり多いことは、私には不満です。賞賛するとともに学ぶことも重要です。「日本の発展は日本人の発展である」と、私は考えます。モンゴル人のことわざの、「ものの道理はソム（村）長次第」とは日本人のことを指すのでしょうか。こういうわけで、私が日本人の本質を「明らかにする」考えにとりつかれてから2年が過ぎました。日本人は小さいことを小さいと不満に思わず、大きいことを大きいと恐れぬことを学んでいるようです。考えてみてください。日本の母親達が、「起きろ」、「やめろ」といった責める言葉の代わりに、「起きなさい」、「やめなさい」と言うことは、些細なことではありません。人をこうして教育し始めるのです。日本人は、科学の多くの偉大な成功を手に入れました。概して日本人の伝統的な心理は、我々のものとはある面では大変異なるものです。例えばモンゴル人は、「考えてもお金は稼げない」といって互いを馬鹿にします。ところが日本人はわざわざお金を払って、頭のよい人達に討論・思考させ、そこから新しい考えを得、それを生活で利用し大きな利益を得るのです。子供達を幼い頃は自由にして、才能を見極めることに努めます。子供達は学校にはいると、細かい規則に縛られながら勉強します。子供達を丈夫にする、体育を学ばせる、教育を身につけさせることに非常に重点をおきます。「子供に金をやる」と言う人達は日本にはいません。日本人は子供に残す最も重要な遺産は教養である、と代々理解し、そのためにはお金を惜しみません。今日「日本の奇跡」の中心となった日本のエンジニアの姿が実現していることを学んでみたいです。この姿は日本の教え、生活の結果、生まれた日本人の典型的な姿でしょう。30才の青木さんは「ソニー」社に勤めています。中背でピンと伸びた背筋、上品かつ軽快な足どり、時折ほほえみを浮かべる色白の若者が、青木さんです。青木さんは誰とでも、それこそとんでもない顧客とでもうまく交際します。彼は5年前、3つの試験にうまくパスしたので、有名な「ソニー」社でエンジニアとなったのでした。

彼は、現代物理学の半導体理論に依拠した、テレビ改良のためのあるプロジェクトを進めたので、経験豊富なエンジニア達に受け入れられました。これには専門試験がありました。しかし今日彼のプロジェクトは実行されています。青木さんは英語を母国語のように知っているだけでなく、ドイツ語もかなり知っているので2つめの試験にもパスしました。彼は大変健康で、水泳、バスケットボールが上手なので、最後の3つめの試験にもパスしました。青木さんは学生時代、古都奈良を見て祖国を誇りに思ったそうですが「ソニー」社に入社後は、この誇りをますます強くしたのです。

「会社の発展は日本の発展です」と彼は堅く信じています。青木さんは小さな茶色の鞆の中に、

回路図と計算機を常に持ち歩いています。本、雑誌を何十冊も読み、考え、回路を改良するために絶えず仕事をしています。青木さんは、何十軒も電気製品店がある「秋葉原」という通りを歩くのが好きです。このようなエンジニアは、新しい器具、製品のことを絶えず頭にいれておきます。そしてまとめます。未来を予測してみます。青木さんは、全てのものを一斉に作るようになり、製品はどれも高品質になり、生産は1つの形態に管理されずに弾力的になり、製品は注目を浴びるためにおしゃれになり、一般にずる賢い商品形成をするようになり、余計な出費のかからない、安くて携帯に便利なものになるに違いない、という「日本の原則」を繰り返し実行している若者です。けれども青木さんは、自分は「真の日本人」の域に至っていない、と言っています。「真の日本人」の理解とは、完ぺきな理解のことなのかもしれません、天皇裕仁は、きっとそのような「真の日本人」の一人だったのでしょう。

日本に関する 私の考え

オヨン メルゲンブーベイ

チョイバルサン市10年制第1学校8年

僕の血筋のもつれた系譜の一部分は、珍しくも奇妙な出会いによるものなのか、でなければ今すぐには説明できぬ真の歴史のために、怪しくも、遠い国日本と関係がありました。僕の祖先は、チンギス・ハーンの生誕地であるブリヤート・モンゴルに代々住んでいました。私の祖父であるバーバイ・バザルじいさんは、若い頃、ロシア艦隊に勤務するため召集され、1905年の日露戦争に参加したそうです。祖父は僕にいつもその時の話をしてくれました。祖父はある激しい戦いの後捕虜となり、3カ月余りある収容所にいましたが、その収容所には、数百人の捕虜の中に二人のブリヤート・モンゴル人兵士がいました。この二人の兵士に日本人達は親しみを感じていて、食べ物さえ余分にくれて、私たちの起源は同じなんだ、といつも語っていました。このときから、モンゴルと日本は同じ起源である、という考えがバーバイじいさんにはしみつき、それを考えながら拷問台に向かったそうです。バーバイじいさんが釈放され、軍からも除隊されて故郷に戻って来て以後、ロシアの内戦は激しくなり、彼は仕方なく故郷を離れ、兄弟国モンゴルへ1912年に移って暮らしました。オノン、オルズの肥沃な土地で、家畜を放牧し子供を育て平和に暮らしていたバーバイじいさんは、スターリンの陰謀により、日本のスパイであるという不当な理由で、1933年に逮捕され被害を受けました。その後彼は1989年に無罪となりました。

国家、人民のために、疲れも忘れて戦うほどの敵対関係を全身で体験し、火薬の煙の嗅った片田舎で剛健な日本人が語った、「私たちこそ同じ普通の人間、モンゴル人と私たちの起源は同じである」、という思いは、多分強い影響を及ぼしずっと忘れることはないだろう、と僕の家では親戚中、代々語り継いでいます。

僕も成長し大きくなって知恵がつくにつれ、上記のような歴史にますます関心を持つようになり、父にいつも話してもらって、モンゴルと日本は同じ起源である、という言葉の歴史的事実関係が分かったらなあ、と思うようになりました。東アジアの北海道、本州、四国、九州という4つの大きな島、その周辺の無数の小さな島々の上に、鉄鋼、エレクトロニクス、船舶、自動車の他、石油・化学工業を高度に発展させ、モンゴルの寒冷な気候の西部地方、東部地方の高度な文明生活を有する「大洋の国」ジャパン、中央アジアの高地に存在する自然の素晴らしい姿を、比較的保存し残している遊牧経済、ハーン（皇帝）時代の文化・歴史を有する「大地の国」モンゴル、両国の間で類似する点は一体何なのでしょう？

アメリカの原住民であるインディアン達は、モンゴルから分かれていった、と一部の研究者達が認めているように、モンゴルの「大地」から日本人は「大洋」の島々へ移り住んだ、ということなのでしょう。

モンゴルと日本の子供が蒙古斑を持って生まれるのは、一体どうしてなのでしょう。日本の音楽を聞くと、私たちの民族音楽の旋律に似ているようです。有名な俳句は3行詩ですが、世界の3つのすばらしいもの、3つの悪いもの、3つの黒いもの、3つの赤いもの…など、モンゴルの3行詩は、その素晴らしい有名な俳句と似ているようです。他にも僕の知らない生活上のいろいろなこと、伝統的な家庭生活、習慣、遊びに至るまで、似ていることは何であろうか、とわずかながらの知識を集めて思案しています。この全ての問題に私たちの国の有名な学者リンチェンやダムディンスレン、元朝秘史を日本ではじめて翻訳した学者ら、各時代の学者達は答えを出しているのでしょう。読めたらなあ、分かったらなあ。いずれにせよ、現代の人たちからも、多くの新しい答えが得られることは明かです。日本がモンゴルで行っている「ゴビ」、「ゴルバン ゴル」プロジェクトも、両国の人々が互いを知り合い、平等な距離からつき合うのに貢献するでしょう。

日本についての 私の考え

マダクマー トヤー

ドンドゴビ・アイマク

マンダルゴビ・ソム10年制第一学校

地球上に並ぶ多くの国々の一つである、アジアの東岸に沿って北海道、本州、九州、四国といった4つの大きな島がある日本という国が地図に記されています。私達は昔の歌で日本（リーベン）という名前を口ずさんだぐらいで、日本についてはあまりよく知りませんでした。このたった4文字からなるこの国の名前の向こうから、勤勉な人々の高い文化、ライトの明るい町の通りで楽しく遊ぶ子供達というイメージがまず最初に思い浮かびます。きっと、勤勉な人々の努力によって世界の中で高く発展した国の一つになったのでしょう。我々2国の間で、1972年2月24日に国交が成立して以来、2国は平和な関係を保っています。どの国もそれぞれ、歴史、文化、習慣、気候、生活の独自性を持っていて、比べてみるとそれぞれ違います。日本では：1945年8月の蒸し暑い日…ちょうどこの時にアメリカ軍が日本の南部の広島、長崎に政府の命令で恐ろしい原子爆弾を投下し、何千という人々が命を絶ったのです。しかし日本の人々はこの悲惨さの前でもへこたれることなく、そのままの状態を望まず、闘い、働き始めたのです。彼らは昼も夜もなく汗を流してこの困難をあきらめることなく乗り越えて来た民衆なのです。そうです、その結果、町の中央に建物がそびえたち、科学技術が発展し、生活の知恵を学び、教養を身に付け、生活のレベルが向上する、などといったいろんな理由で日本という国の楽しい、幸福な生活の明るい未来への道が描かれているのです。日本のほとんどの家族は平均2人の子供を持っています。多くの家庭がヨーロッパ式の住宅で生活しています。人々は住宅を建てる時、自分達の快適な生活を考え、24時間活動している町、周りの景観、将来の発展を考えて、広場の利用、風向き、日当たりなどすべての条件をあらかじめ考えて計画を練ります。彼らは単に、安くて近いところで安心するのではなく、良質の建築材料でできた、きれいなうちを建てることに努力します。部屋の一部は民族的な物を取り入れ、引き戸、引き窓をつけ、床は「畳」という密で柔らかい敷物を敷きます。日本の家に必ずあるものとして、カラーテレビ、ラジオ、洗濯機、冷蔵庫、掃除機などがあげられます。日本の人々はそれぞれ小さな土地と耕地を持っています。日本の会社は、労働者に会社までの交通費、休日出勤手当、住宅手当などを出して激励しています。日本人は高給料で短時間の仕事にはそれほど興味を示しません。そのわけは勤務地と労働時間が一定していないからです。日本人はお金を細かく計算して使います。これは高度な消費文化を意味します。家族に関しては、女性と男性の担う役割が、モンゴルと比べてみると同じではありません。家の主人である男性達は労働をし、社会の発展の大部分を担っています。彼らはほとんど定職に就いているので、家の中での仕事にはそれほど加わりません。しかし女性達は結婚する前に、教養を積み、学校を卒業してから仕事に就くことを望んでいます。まもなく彼女達は家

の主人となる人と結婚し、家の中のほとんどのことをすると同時に、自分が学び知ったことを子供達に教え、教育します。ですから、日本の女性はほとんどが家で働いていると言えます。子供達に関していえば、学校で学ぶことが彼らの義務です。勉強して教養を積むと同時に、さまざまなグループで頑張り、知識を強固にするのです。どうして？ということのすべてを思いめぐらしていくと、この広い世界は面白いこと、驚くようなことでいっぱいであると思うのです。日本の家庭がますます幸せに満ち、かわいい子供達が笑いと喜びでみちあふれかえるようになってほしいなと思います。

日本についての僕の考え (僕が空想すること)

バルドルジ ザグドスレン

ゴビールタイ県10年制第1中学校

—1993年卒

笹川財団の招きで来日中の僕達が、日本の北の地方に行くと、その冬景色はとても美しく、またすばらしいのです。日本の冬場の景色が我がモンゴルの冬景色と似ているとはいっても、そこには、物語の世界に入りこんだような、目を奪う雪と氷の芸術があります。ガラスで作ったかのような美しい建築物、山、少女の彫刻はなんてすばらしいんでしょう。雪や氷のこのようなすばらしい芸術を母に見せたら、（一度飛び上がって咳込むだろう）孝行できるなあと思いました。

モンゴル・日本の同年代の少年たちの間で行なった雪玉投げ、つまり雪合戦はとても楽しかったです。僕たちの作った雪玉は合戦で投げるとすぐに粉々になって負けてしまいます。日本の子供達の作った雪玉を内々で見せあうと、だいたい同じ大きさに決して壊れず良くできているのです。僕たちが驚いて尋ねると（女性の通訳を通じて）、雪合戦をする時には小さな雪玉を雪の上で転がして固くさせ（3～4日の間）、注意して大きくします。このようにした後、雪玉をたがいにぶつけあって誰がうまくやったかを見て遊ぶのです。

また、同じ1月に鳥をおどかして遊ぶ遊びをします。

雪合戦をしている時、僕はある少年と知り合いました。名前はアスカ、高校2年生で、父と母と弟と暮らしていて僕と同じ年です。

僕を家へ招いておもちゃでもてなして趣味のサッカーを見せてくれました。僕と同じくサッカーに興味があるなんて、なんて面白いんでしょう。互いに自分の国の少年少女について話をしました。

5月5日は「男の子の祭り」です。男の子達はたくさんの提灯で飾られた古いお寺に入って、悪を倒すという内容の、人々を圧倒する劇を行なってお参りするそうです。

11月15日は「七五三」で、3、5、7歳の子供達が神社に行って清めの祝詞を読んでもらってお参りをするそうです。

4月には花が咲き、5月にはすべての人々、子供たちが先生と共に田植えをするそうです。6月は雨の季節なので植物が良く成長するそうです。僕の友人のアスカは秋になると、「子供の作品の日」コンテストに自分で創作している「空気清浄器」を出品するそうです。僕は友人の成功を願っています。僕はまた、モンゴルの子供、青年について興味をもってもらえるよう話しました。僕もアスカも2人とも、各々の友人達に話すことが沢山できました。アスカと僕の2人は親友になり、家の人も僕を見送る時に2人の仲がいつまでも続くことを祈ってくれました。モンゴル・日本の友好が確かになっている今、僕達の間架け橋となる『言葉』をよく学べば、アスカと僕はこれからもよりたくさん話をすることができるようになるでしょう。

日本の笹川財団がモンゴルの少年少女を日本に招いている時、モンゴルの民族センターが日本の少年少女をモンゴルに招く時がまもなく来ることは間違いないでしょう。その時、僕達は雪合戦をうまくやれるようになって上手に遊びたいものです……。

私の考える日本

オフナー オヨンサロール

ドルノゴビ・アイマク

ダランジャルガラ・ソム

8年制中学校

もし私が魔法をもっていたなら、一瞬のうちに日本というあの素晴らしい国へ行ってみたいという願いを叶えるでしょう。私は翼をつけ、日本へと羽ばたいて行くのです。外に出ると、永遠なる蒼天を遮る雲もなく、景色は完璧でした。突然、あっという間もなく、両手が帝釈天の鳥の翼のように羽ばたき続け、瞬く間に大海を越えて、本州、四国、九州、北海道の4つの島と他の多くの小さな島からなり、1億2400万人の人口を持ち、37万7,000平方キロメートルの面積を持つ日本の、その首都東京の中央に到着しました。私は1年余り前から文通を始めたペンパル桜さんの家の周りに羽のようにふわふわと舞いながら着陸したのです。

桜さんは初めは私の顔がわからず、私が先日送った写真を持って来て見比べていましたが、遠い外国モンゴルから来た親戚よと言って熱烈に歓迎してくれました。桜さんは民族衣装である「着物」を着て、草履を履いていて、日本人の少女であることがすぐ分かります。彼女は16才で、ファッションデザイナーで東京のある広告会社に勤めています。桜さんが私を応接間に招いて、彼女の両親を紹介すると、2人は私を日本の習慣でもてなしてくれました。食卓には、民族料理であるさまざまな海草と刺身とご飯とで彩られたいい匂いの美味しい料理や飲み物が並べられていました。ご飯をパンの代わりにそれぞれの料理と一緒に食べ、生の魚を客に出すという習慣があるということを彼女は教えてくれました。私は日本で5日過ごして、日本の楽しい習慣を一部ではあるけれども知ることができたのです。首都東京には1,200万人の人がいます。桜さんと私は、一緒にたくさんの工場、会社、学校、文化施設を見て回りました。

こうしてそこにある生活を知り、自分達と同じ世代の人々が一生懸命教養を身につけ、仕事をし、それに励んでいるのを見て、いつか我が国も、若者や子供達が労働と学問を修めて、その結果先進国に匹敵するようになるだろうと思いました。もし私の考えが本当になったら、当然ながら、私たちの世代はかなり長い時間、学問に励む努力を強いられるでしょう。

日本の人口は我が国の120倍で、国土の面積は5分の1であり、また自然の資源も少ないけれども、わずか25年の間に世界で最も発展している国の1つになったということは、日本より5倍大きい国土を持つモンゴルは2010年には世界の高度に発展した国々のレベルに至ることができるということになるでしょう。私たちはそれを実現するためどうしなければならないかを知っているつもりです。

ある日曜日の朝、桜さんと私は1945年にアメリカ人が投下した原子爆弾の被害を蒙った広島に行って、名前の刻まれた正面からみた鞍のような形の石碑に行き、黙祷を捧げました。この時私は、「広島島の少女の折り鶴」という歌の文句をはっきりと思い出しました。自国のことをニッポンあるいはニホンと言い、モンゴル人はリーベンと記し、ヨーロッパ世界ではジャパンと呼んできたこの国で

は、心を惹くようなことがたくさんありました。しかし時はすぎていき、母国に帰ることになりました。桜さんは太陽の光が澄み切っていた朝、目に涙をいっぱい浮かべて見送ってくれました。そうです、人間の考えに国境などないのです。このように素晴らしい夢を持って、あの素晴らしい日本という国をこの目で見たらどんなにか嬉しいことでしょう。私はいつか仕事で成功を収めたら、海の向こうの日本へ行きます。

私が考える美しい夢の素晴らしい国、見目麗しい国、日本に行ってみたいと思います。

私の考える日本

ヤンサンジャブ ナランゲレル

アルハンガイ・アイマク

エルデネボルガン・ソム

10年制第一学校9年生

民主化のおかげで、我々はアジアで最も高く発展した日本の人々について、広く知ることができるようになりました。彼らの生活、習慣、そして若者の面から言えば、彼らがどうやって教育を受けているか、何に興味を持っているのか等々。以前、私はこの国についてほとんど何も知らず、ただ世界の資本主義国の一つであることを聞いたことがあっただけです。

日本は4つの大きな島である本州、北海道、九州、四国とその周りにある多くの小さな島々からなる、37万平方キロメートルの国土を持っています。首都は東京です。人口はアジアで4番目であり、全人口の90%は日本人です。世界で最も人口密度の高い国の一つで、平均1平方キロメートル当たりの人口は370人です。季節があり、周りを海に囲まれているため、冬でも夏でも雨や雪がよく降ります。日本では機械や、現代のコンピューターの技術を広く利用しています。しかし、これらは単に、私が地理の授業で知った知識でしかありません。

私はまだこの素晴らしい国に行ったことがありませんが、現代風の高くそびえ立つ建物、きれいでおしゃれな通りや広場を往来する人や車、木々や草花に色どられた公園、そして美しい自然を想像します。私は日本を自分の目で見たいと思っているモンゴルの何十人という少年少女のうちの一人なのです。

1990年から、日本に関しては、新聞や雑誌、ラジオ、テレビによって多くの新しく、珍しいことを知ることができるようになりました。これらの情報の中から、日本の子供達がいかにして勉強し、教育を受けているのかが私にはとても興味深く思われました。

先日ある新聞で日本の教育システムについて読んだことを思い出しました。このことは私にとって興味深かっただけでなく、その教育システムから学び取り、見習う点があると思いました。日本の子供達は私達と同じように勉強し、教育を受けますが、違う点もまたあるようです。つまり、我が国では無料で10年間勉強し、大学や専門学校に入るのに比べて、日本では無料で6年間小学校で、3年間中学校で勉強した後、2～6年間大学で勉強します。日本の小学校は大体公立で、全小中学校のわずか0.6%が私立です。それとは別に、学校外でも有料の塾で勉強をします。こういった塾で児童の60%が勉強しています。我が国でもこのような有料の塾が開校されて効果を上げています。私もこの前英語塾の3ヵ月コースで勉強しました。

また、日本の学校は英語に特に重きをおいて多くの時間をとっていると私は聞きました。これ以外にも、日本の小学校の評価は我が国とは違って3段階で評価し、1クラスに35～40人が勉強するということも聞いています。授業は話し合いの形で進み、実験を主に行うということが私はとても気に入っています。

日本の児童の私達と違う点は、彼らが鉛筆で書くということです。そのわけは、間違いを直すときに簡単だからということです。私達が授業が終わると本やノートを家まで持って帰るのに対して、彼らが自分のロッカーに入れて鍵をしめ鍵を持って帰るのは、私にとってとても興味深いことであったことは隠しようがありません。これは児童達が重い荷物を背負うことから解放するものであると解説されたものを読んで、子供達が正しく教育を受け、健全に学んでいる理由はここにあるのだろうかと思いました。

日本の学校の教室は現代の技術のすべてが装備されており、また、体育の授業は高いレベルで行なわれています。全学校の93%には完全な設備のある体育館があり、70%以上にはプールがあり、そして全学校に運動場があります。

暖かい時には児童達は授業の休み時間に皆で外の運動場で遊んだり、公園で遊ぶことを見ても、先生方が子供達を「ともだち」と呼ぶのを見ても、日本の子供達に関しては、誰が誰と友達であるのかを尋ねる必要がないのです。

どの国のどの学校でも、児童達が必ず守るべき規則があるのは疑う余地がありません。例えば我が国では、学校の中にも校則があります。こういう規則は日本の学校にもあり、彼らはこの規則を固く守っています。

日本では、子供達の髪型、服装の長さをぴったりと決めた長さにさせる以外に、先生方を非常に尊敬し、彼らの言った言葉は児童にとって法律と同じようなものとなっています。更に子供達をコンピューターに小さい頃から慣れさせ、利用させて教育します。全家庭にコンピューターがあると聞いたことがあります。これは私にとって特に興味深く思われたことで、自分の目で日本を見たいという気持ちがますます高まりました。

国家の発展の方向はその国の子供達である私達が、何をどれだけ学ぶかにかかっていると私は思います。日本の教育、学校のシステムが国家の未来を担う子供達に影響を与えているのです。だから日本はアジア大陸、そして世界の中で高度に発展した国の一つに数えられるようになったのだらうと私は思います。私も、日本という国を自分の目で見て、そして自分の国を日本のようにすることができればいいなと思います。

日本人の習慣・生活のいくつかの 特徴についての私の考え

ユラ バイガルマー

ドルノゴビ・アイマク

医科専門学校治療科1年

日本に行った人達からこの国のことについて驚くような話、時には信じられないようなことを聞き、日本の民衆が習慣や歴史・伝統を今に至るまで守ってきたなど、我々にとっては模範となる素晴らしい日本人の気質を耳にします。

私はこの作文を書くために、日本に関しての本を集めて読み、日本に行ったことのある人達に話を聞き、よって、日本に行ったのと同じぐらいの知識を得たことを何よりもまず記したいと思います。

日本は経済力の強い国で、科学技術も多く、多くの面で世界のトップを行く国であることを、我々モンゴルの若者が、我が国で民主化が起こったここ何年かの間に正しく知ることができたのはとても喜ばしいことだと思います。

経済が高度な発展をした時点で、人に注目をしてみると、日本人は皆、祖国を発展させるために休む間もなく働き、物を作り、使い、経済を発展させるという目的をもって働いてきました。

その例は、会社員が誰に命ぜられるでもなく仕事場に残り、残業をすることです。またそれだけでなく、有給休暇のうちたった半分しか休まず、働きます。他の人が働いている時に自分だけ休むのはいい気分がしないという考えで、労働者は自分の仕事に自分の身を捧げるのです。これは彼らの、他人とともにあるという姿、日本人の勤勉な気質の明らかな例と言えるでしょう。

偉大な日本で、日本人はその客好きで、やさしい、礼儀正しい性格を現代の高度なサービスの要請に合わせて、それをほとんど制度とすることができました。

言い換えれば、買う側だけでなく、売る側も感謝の意を表すのは面白いところです。そうしてみると、我が国で、特に買う側が感謝の意を表すのは、日本の習慣とは全く違う考えと文化を持つサービスの形なのだと思います。

日本人は時間をきちんと守る人達です。よる7時に閉まる店では、6時59分でも外から人が入ってきます。一度入って来た人には完全なサービスをしてから店を閉めます。

一般的に日本人は人のことを悪く言わず、でたらめを言わず、憎しみを持たないで、お互い仲よく尊敬しあってつき合います。これは文化的な人々の気質だと思います。

日本人があいさつする時に頭を下げるのは、「あなたのことを警戒せずに信じています」という意思表示で、手を後ろに組まず、前に組んで立つのは、「手に何も持っていませんし、後ろにも武器を隠していません」という昔の習慣だそうです。

現在、本や映画を見ると、日本人の外観は非常にヨーロッパのものを取り入れていると言えます。人々が黒っぽい背広と白いシャツを着、ネクタイを締めるのがほとんど習慣になったかのように見

られます。しかし、家の中や旅先では民族衣装（ゆかた）を着るようです。とは言え、日本人の外見は変わってしまっても心の中はいつまでも日本のままで、日本という祖国、天皇の伝統的な習慣、儀礼などを尊重する心は彼らの体の芯まで染み込んでいるようです。

西洋文明の多くの地へ行き、見聞を深めた知識階級にしても、国境から出たことのない一般の労働者にしても、結局は仕事や生活に目を向け、他人との付き合い方が日本のままであることは彼らの誇りであり、祖国を愛する心の証なんだなという考えが私の中に生まれました。

日本の家族は世界で一番安定していると言われています。これは経済が健全な状態にあり、また日本人が愛に対して誠実で、たった一度の人生を愛し尊重していることのよい例だと見ることができると思います。

小さな国土に多くの人が生活している日本人の人間関係はとても特徴的で興味深く、また、彼らにとってはそれが誇りであるようです。

私の考える日本

エンフバト

ホブド・アイマク

ムンフハイルハン・ソム

"ムンフ・オルギル" 株式会社

民主化が発展し、馬乳酒の香りが漂い、馬がいなくモンゴルの草原の遊牧民が、島国日本と親密になり、よき友人となり、共に働き、生活し、学んでいると言ったら、信じられないと思いますが、それはまた喜ばしいことだとは思いませんか。

アメリカ軍が世界大戦中に何の目的理由もなく長崎と広島を実験のためだけに爆撃しました。それが瞬く間に何百万という一般の労働者や民衆に帰る家をなくさせただけでなく、親を亡くし、家族と別れ、身体障害を持つ人を生じさせた原因になったことについて、私は中学校のときに非常に心を痛めながら聞いたことを思い出します。私の考えでは、爆撃して何もかもを消滅させてしまってもアメリカは実際は勝利せず、放射能がまき散らかされ、煙りが巻き上がって廃墟となった中から身体障害の人までが一生懸命働くという悲しみに這いつくばって耐えることができた日本が勝利したのだと思います。日本という国は、行ったことがない人にとっては、おとぎ話のような素晴らしい世界で、人類にとっては本当に驚くべきところです。日本経済は自動車、船舶、ロボット、バイオテクノロジーや化学工場、ビデオ、コンピューターなどの新しい分野を、爆撃された時の瞬間と同じような速さで発展させ、世界の市場のトップにのぼりつめたのです。

何百年も昔から世界に人がいたのとは違い、文明、生活、耕作、農牧業、気候、自然資源、動物、山水の安定していることによって独自の特徴、独自の生活を持つ人々となったことを私達はよく知っています。

彼らがどうして高いレベルにまで発展をしたのだろうか、と自問自答してみました。それは日本人の誠実な性格、お互いを愛し、助け合う、勤勉な気質と密接な関係があると思います。

勤勉な気質の上に日本人の計算能力が高いことにとても感銘を受けます。彼らから学ぶことの一つは、適当に作って捨ててしまう私達モンゴル人は計算した上で作る知恵を見習うべきだということです。

日本の人々が発展の速度をあげていることを考えると、私達モンゴル人の知的水準は低いと思わざるを得ません。日本の国土のほぼ半分は森林や草むらに占められており、有用な鉱物資源はあまりありません。日本人の中には、自然を信仰し、尊敬し、守るという考えが多くあり、彼らにとって周りの自然は金のように大事で、彼らにとって必要なものなのです。彼らは土地を節約するために、空を柱で支えるようにみえる建物をそびえ立たせ、その中には店や食堂、バー、レストラン、映画館、劇場など、現代人の需要を満たすことのできる全てのものがあり、まるで、ある一定の規則にしたがって小さな土地に大きなものを作り、小さな都市を作っているかのように思われます。

科学や電気技術の新しい発見、成功がたくさん生まれ出て、発展途上国の市場において大きな地

位を占め、また、原料の新しい供給地を見つけることに日本政府は大いに注意を払っています。

日本では地震や山火事が多いそうです。このように日本の人々にとっては不可避な自然の影響がとても多いのだらうと私はいろいろと考えるのです。特に、津波によって海岸沿いの地域が被害を受けるのは、日本人にとってどうしても抑えることのできない災害であるのだらうと私は思います。

日本人が海の底に食堂、レストラン、博物館、またそれだけでなく海の底に住む生き物の生活を実際の手で見る事ができる水族館を作ったといっても君達はそれほど驚かないだらう、と前に聞いたことがあります。

そうです、これはとても貴重で、実際とても驚くべきことです。食堂のテーブルに気持ちよく腰かけると、小さな魚の稚魚がガラスの向こうからプカプカ浮かびながら泳ぎ、大きな魚が口を開けて歯をむき出しにして物を食いちぎるやいなや又ゆっくりと泳ぎながら遠ざかっていくのです。私はそれをテレビの画面で見て思わず驚き、そしてわくわくしました。

あらゆるものを巧みに利用する彼らが、全く思いもつかない、作れないだらうと思われたものをすべて作り上げたのは、おとぎ話なんかではないのです。通りやバーやレストランにある人形までがいっぺんに声を出し、踊り、「いらっしゃいませ」という意味の様々な言葉であいさつをし、お辞儀をするというもので、驚くべきものを次々と生み出しているのです。

何百年もの昔から独自の発展を遂げてきた日本は、歴史書にいつも喜びや幸福ばかりを記してはいなかったということは周知の事実であります。

彼らの発展を驚き、称賛すると同時に、日本の人々が気前がよく、世話好きな心を持つ人々であるということを特に記し、そして日本人からモンゴル人に種が蒔かれ、育てられた「桜」の花は両国の友好関係とお互いが助け合っていくことの大きな証しであり、象徴であると思うものです。